彼の私と５年前の私

タジャドルコンボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼の私と５年前の私

【Ｎコード】
Ｎ１３２７Ｙ

【作者名】
タジャドルコンボ

【あらすじ】
５年前私はあの出来事を忘れていたけれど、彼と再会？したことでその記憶が思い出してくる。これは５年前あの地獄のような出来事である

いつもの日常5年前の出来事とはじまりと（前書き）

あまり上手ではないのでご承知ください

いつもの日常5年前の出来事とはじまりと

彼は今どうしているのだろうか。5年前にある男とであった。私は当時１１歳だった。当時そこに何があるのかはわからなかったけれど、危険なものであり、ここにいてはいけないとわかった。そして私にはそのあと記憶が抜かれていた。覚えていることは5年前にあった彼のこととともう1つの世界。そしてもう1人の私だ。

そんなことも忘れて私は１６歳となっていた。現在高校2年生の女の子です。取り立てて個性というのはないと思う。今までに何かに打ち込めるといった機会がなかったから私には将来のことなんて考えていない。まだ先と思っていたが、周りはもう大学だとか就職だとか夢や希望を持ってそれぞれ生きているって感じかな。

「私って何のために生まれてきたんだろ」

「難しいこというね、でもうちはそうだな、生まれてきたのは佳奈と会うためだと思うよ」

彼女の名前は相沢美希（あいざわ みき）ちゃん。ちなみに私の名前は宮本佳奈（みやもと かな）です。

っで現在彼女と町をぶらぶら～とまわっていたということなのですが、さすがに私も彼女もやることがなくて近くのファーストフードに入ったわけだけど、本当にまだ帰りたくないな。

私の家は父が1人母は現在ローマだったかな。音楽家なのである。その3人家族である。

「暇だね～、ってあれ健二君じゃない？」

「ああ塾の帰りかなんかかな、大変だね～」

塾ね～うちはお金ないからそういうの無理だな。まあ別に面倒だからの言い訳に過ぎないんだけどね。

「じゃあ帰ろうか」

「うわあ、もうこんな時間じゃん。やばいって、うちの家には今ダイゴロウが庭に穴掘って埋めなきゃならんの忘れてたよ。じゃあ

ね」
「うん、がんばってね」
まさかそれが彼女との最後の会話だとはこのとき思わなかった。
と一人とぼとぼ歩いていたら私はいつの間にかベンチで寝ていた。
「え、なんで？私なんでこんなとこにいるの」
「よお、ようやく起きたな」
聞き覚えのあるようなないような声が聞こえた。てか男性の声かな。なになに私、なんかされちゃったわけ？というよりも突っ込みたいことはひとつあった。
「ここどこーーー」
「おいおい、そんなに騒ぐなよ。やつらに気づかれるって」
「あなた誰ですか？」と聞いてみたら
「あれ？覚えてない？俺だよ、ったく最近の若者は忘れっぽいんだな。俺は５年前のあの事件でお前に会ったはずなんだか」
ああまた５年前のことか、忘れられた時間だなそれは。
「仕方ないな、痛くも怖くもねえからちょっと待ってろ」
と彼は私のおでこに人差し指を突き出した。
「今から全部思い出してやるよ」
っと私の頭にはあるものが見えてきた。

５年前当時私が１１歳
まだ私の背中には赤いランドセルが似合っていたときだった
「帰ったら～♪手を洗って～うがいごっくん！！のもと～」
といいながら歩いていたら。なにやら何かを感じたような気配に陥った。そして…
ウー
とばかでかい警報機がなった。一体何があったのか当時の私にはさっぱりわからなかった。
そして空の色は一気に暗くなった。そう世界の破滅が始まったの

だ。人間には打つ出がないようだ。
「たすけてくれえええええ」
「死にたくねえええ」
「きゃあああああああああ」
私は怖くて怖く寝泣き叫びしかなかった。そう何が起こったかというと、世界は悪魔みたいな種族。
古代からの破壊者、闇族の侵略が始まったのである。

ある男の回想
「ちっくしょお、始まっちまったか」
そう２０１２年俺達の世界は崩壊するということは本当だった。
そしてその予言は俺は知っていた。
『世界は闇に包まれて滅び去る』ということが昔からの言い伝えだった。
「俺には何かできることはないのか。俺に力があれば、くっそおお」
仕方がないさ、俺はまだ２０歳、年は関係ないのだが、闇族を倒せるのは、巫女（みこ）しかもそれも特別な女子　が必要だということだ。
俺はこの１０年間探し続けたが、見つけることはできなかった。
「火があっちまで広がってる。これが俺の町だって言われても信じられねえ」
なんとかしないとな、いったん家に戻ってなんとかするしかねえ。
護身用ではあるけれど、何とかこいつら倒せ　そうな武器はある。
今戻れば何とかなるかもしれない。けれど、
「今戻るには、あの地獄を通らなくいちゃならんのか」
そこは闇族が広がっていて、地獄のようだった。
「なんとかして帰らないと死んじまうな、行くしかねえな」
俺は火の間をくぐっていった。

私の回想

「うえええ、お父さん、お母さん。助けてよ」
私には何が起こったのかさっぱりわからなかった。このときまでには私の記憶があった。
「ここどこ？、いやあああああ、こっちこないでよおおお」
そこのへんてこな化け物が私に迫ってきた
「こないで、こないでよおおおおお」
そのとき化け物は警戒したかのように去っていった。

ある男の回想
「くそお、こっちまでいやがるぜ、くせえな、ったく町は全滅だな」
まるで生き地獄だぜ。参ったな。こりゃ巫女までもが死んじまってるかもしれないか。俺に後できることといっ　たら、滅び去っていく世界を見るだけしかないか…、はかない人生だったけれど、楽しかったかな。巫女探しで　精一杯だったけど。俺は満足だな。もう終わった。でもそれでも最後までやることやってから、死ぬ。それが俺　の家のルールだ。
「あぶねえ、ええええええ」
危なかった。もう少しで建物の下敷きになるところだったぜ。俺は冷や汗をかきまくっていた。
そして俺は運命的な出会いにあったのだ。
そう１０歳くらいの女の子とだった。そうその女の子とは、最悪な出会いだった。なぜなら女の子は闇族に襲わ　れそうになっていた。
「くそお、俺に力があれば」
「こないでよおおおおお」
「ごめんね」
でも不思議な事が起こった。
「闇族が去ってる。なんでだ？まさか」

私の回想

私は何かが去ってほっとしておいた。だけどあっちから何かがこっちにやってきていた。

「またあ、いあっややあやややっやあああああ、もうこないでよ。もういやだよ」

本当に泣きまくっていた。女の子なのになんて無様な顔だったのだろうと思っている。今となっては恥ずかし　い。それがからとの出会いだったからだ。

「君、大丈夫だった？けがないかな」

ある男の人が歩み寄ってきてくれた。

「だいじょぶれす」

泣き声で言ったので、彼は少し笑った。

「じゃあ、ここは危ない。あっち行こうか」

「あっはい、えっと」

「俺のことはそうだな、イケメンお兄さんでいいよ」

彼はバカじゃないのかと思った。こんな状況でボケている場合ではないのに、彼は今笑っていた。たぶん２０歳　くらいだと思う。なぜか今私はほっとしている。

「じゃあ変態さんで」

と子供が最近覚えたよ、といた言葉で言った。

「すまんそれは完全に落ち込むわ」

そうやって私は笑ってられた。安心があったからだ。

「俺も少しは力を使えるんだけどな」

「力？」

「超能力みたいなもんだな、まあ君とは違うけどな」

私は彼がいっている言葉はわからなかったけれど、うんうんと笑顔でいられた。

と走っていると、急に立ち止まった。

「なんですか？ここはどこですか？」

「やっとついたよ。ここは俺の家だ。さあ早くして！」

「ふえ？」
意味がわからず、なんか１つの部屋に入った。中央にはなんか勾玉みたいなものがあった。なんだろうかなって　思った。いろいろあり、赤に青、黄色と白まであった。
「きれい」
「おまたせ、早くこれに着替えて、早くいいからさ」
「え、わかりました」
と、よく神社にいる巫女さんだったかな、そんな衣装だった。
「おっと、その前にどれが君の勾玉、いやパートナーか、確かめないとね」
彼が言ってることは独り言なんだろうか？
「お、どうやら赤だね、赤の巫女か」
「赤ですか」私黄色がよかったな。きれいだし。好きだし。
「うん、じゃあこの赤いやつに着替えて、急がないと被害が出る。ここならまだ被害は受けないけど、いそがな　いと大変なことになってしまう、だからさ早く」
私はあることに気がついた。
「どうしたの？早く着替えて」
「あの、そこにいられたら、着替えられないんですけど」
「あ、ごめん」
…　…　…
「着替え終わりました」
「おお、じゃあいこうか、えっと赤の巫女”レッドミデアム”かな、確か赤い巫女はそう呼ばれていたはずだ」
それは名前的に私はいやだ。小学生の私が抱いたものだった。
「普通に名前でお願いします」
「そういえば名前なんだっけ、聞いてなかったよ」
「私は宮本佳奈（みやもと かな）です」
そういって私はこの男に家からでて、再びあの地獄へと出陣していった。何のためなのかわからなかった。だって普通に考えたら、

あのような危ない場所で、しかもこんなコスプレでどうしようというのだ。華麗に死にたいのならわかるけれど、これはなんでも意味が不明だった。

「あの、なんでこんな衣装に着替えなくてはならなかったのでしょうか？」

「ああ、戦闘服だよ！」なら意味ないじゃないですかーーー！！

まあそんなことはどうでもいいとして、なぜ私はこの人にしかも走って、あの地獄げと行っているのかわからない。助けるなら、あの家でかくまってくれればよかったのに。小学生の頭では考えられなかった。

「着いたよ。疲れたでしょう、はいお水ね」

飲みかけではなかった。いつ買ったのだろう。自販機はどこもほぼ全滅で、しかも生きてても飲めそうではなかった。後で聞いたら家から持ってきたらしい。私が着替えているときに準備した時に取ったらしい。

「それにしても、この衣装最初はサイズ合わないと思いましたけれど、今ではぴったりですね」

「ああ、服自体に霊気みたいなものがあって、まあ意思があるってって言った方がいいかな。まあ生きてるってことだよ。そいつが君に合わせてサイズを合わせてくれるんだよ。まあ成長に合わせて徐々に変わっていくから死ぬまでは着れるね」と最後は満面の笑みで言った。

「まあ一番成長しなくちゃならないのは…」とこの男は私の胸に目がロックオン！していた。

「どこ見てるんですか！変態！！！」

いったい何やってんだろうな私は、いろいろ知らなくてならなかったと思う。家族のこととか友達のことだ。どうやっているのか知らなくてはならないだろうけど、今私は変なことをしていた。そう、私は

「んっと、勾玉になんで念じなくてはならないんですか？」

勾玉に必死に念じていた。なんだかよくわからない。
「まあ、まだ初見だからな。まずは力を入れなきゃ稼動せんだろうからな」
自販機ですかこれは、
「もういいと思うけど、あんまり時間もないしね。さあて術を唱えてもらおうか」
「術？」
「そう、巫女は術を唱えて攻撃するんだ。まあ赤い巫女のレッドミデアムは主に火とかそういったのが多いかな。君結構見た感じではまだ力は未熟だと思うんだ。あと5年くらいだとかなり強い力が使えるけどね。でも君の力は強いよ。でもコントロールはできないから俺も一緒に安定させてやるよ。最大の一発でする術があるんだけどね。でも少し危険なんだよな」
少々この人の独り言聞いていた。ちょっと疲れた。まあ大体わかったけれど、大幅理解不能だった。
「危険なんですか？」
「うんまあ、あれだ。すこーし記憶が飛ぶかな。うっすらとは残るんだけど」
「記憶ですか、どこら辺くらいまで？」
「どうかな、結構衝撃高いから、その術はね、あったことをなかったことにするんだ。年に1回しか出せないけどね（笑）」
う～ん、まあいいかな。こんな地獄なんて記憶消したかったし、この男の記憶も
「そういえば、名前なんですか？」
「俺？ああそういえば言ってなかったな、俺の名前はう～ん、イケメンさんで」
変態さんと憶えて起きましょう。
「さあいくぜ、もう力は充電完了だからな」
「はい、って術ってどうやって唱えるんですか？」
「えっとね。この勾玉に言葉、いや心で唱えるんだ。巫女の力の

源は心だから、その術の名前は”オールデリート”そんままだな」
まったくそのままだけれど、彼はこう言った。
「消したいものを心に思うんだ。記憶でもなんで、まあやつら、闇族とか死んだ人が死んだこと自体消えることもできるからな」それは巫女にしかできないことんだよ。と言っていた。
さあて、やろうかと準備は万端っていうことで体制をとっていた。
「じゃあいくよ、早く唱えて！」
周りのぞろぞろと闇族が増えてきた。彼が言うのも無理はない。でもひとつ唱えられなかった原因があった。
「少し唱えるのが怖いんですけど」
そりゃ小学生にこんなこと怖すぎでないだろうか。今から何が起こるかわからないのに、
「大丈夫だ。俺がいるから怖くないだろ、あと心配すんな。そこまで不安な術じゃないからさ、力をこめるんだ！」
「はい！」なんとなくホッとした。
「じゃあ唱えますね」
「いつでもどうぞ」勾玉が光っていた。もう出せるっていう合図だろう。なんかこの勾玉が生きているって言っていたことが本当だった。生きているぬくもりが感じられていた。
「”オールデリート”」
この術を唱えて、私がいたのは病院だった。っで近くに家族、お父さんお母さんにお兄ちゃんと妹がいた。
「私はいったい何が」とさっきの出来事が頭によぎった。そうだ私はこの世界を救ったんだ。じゃあ彼はどこにいったんだろうか。っとちょっと記憶が薄れていた。

そして5年後の１６歳である。
「どうだ？思い出したろ」
っとさっきの続きである。
「あああのときの変態さんか」

そこが一番思い出せた。そういえば今でもこの人の本名知らないことになる。
「ひどいな～久々の対面なのにさ。まあいいや。それにしても佳奈も大きくなったな、俺が希望していた胸は大きくなってないけど」とこの変態をおもいっきり殴った。
「いって～女はおっかないな」と笑って言った。ふざけてんのかこの変態は
「っで今頃なんで私の前に現れたの？」
そこが一番聞きたかったことで、そしてまたあんなことが怒らないかという不安で聞いた。
「まあ、俺はまだ戦ってるのさ、やつらと、っで君に力になってもらいたいんだけどさ、いいかな？」
まだこのバカは戦っていたのだ。しかも力がないくせに、でも私はこう言った。
「いやだ、今頃現れてその台詞？大体あんたのこともよく知らないし。それに私高校生だから忙しいんだから！！」最後は嘘である。めっちゃ暇です。
まあ目の前にいる変態さんも結構この言葉には重かったようだ、しょんぼりした顔でずっとそこに立ち止まっていた。そして何か言いたそうであった。
「いいたいことがあれば言えば？」
「ん、ああ」もったいぶって、溜めた感じでいた。そして少しイライラしてきた。この人いつもはっきり言うからかな。まあ全然初対面くらいな関係だから知らないけど。
「まあ、その気がないならいいさ、他の巫女探すよ」
「まだ探してるの？」
「ああ、まあお前しか見つかってないけどな。じゃあなレッドミデアム」
懐かしい名前で言われたからかな。このとき黙ってこの変態の背中を眺めていればよかったのかもしれない、だけど今、じっとはし

ていられなかった。
「よかったら手伝おうか、闇族倒しと巫女探し」
「本当！嘘じゃないよね！！」
ぱっと明るい顔で顔を近づいてきた、正直きもい。
「本当だってば、その代わり本名教えてよ」
「ああいいぜ、いや～うれしいな、俺は大道賢吾（だいどうけんご）だ、よろしくな佳奈」
こうして私の変な関係と戦いが始まったのだ。

いつもの日常5年前の出来事とはじまりと（後書き）

見てくれてありがとうございました

これからが始まり（前書き）

まったく上手くはないですが見てくれた人には感謝します。
本当にありがとうございます。
ではごゆっくり拝見してください

これからが始まり

この町、橘町(たちばなちょう)は人口およそ1万人くらいのよくある田舎で、やたら大きな駐車場のあるショッピングセンターに、小学校と中学校がまあ合わせると10くらいでときどき、対抗戦みたいなやつもやっていて、地区大会とかなら絶対顔を合わせることが多い、ここ十年くらいでかなり店とかが増えてきたいわゆる今時の町である。

「っでなんでポップコーン？」

「うまいよ、食うか？」

いらないって、そんな汚い食いかたしていたら。彼はポップコーンを手にどっさり掴(つか)んで舐めまわすように食べていた。正直汚い…。

っと、前回のあらすじをいうと、私はこの男、ついさっき聞いた名前。大道賢吾(だいどうけんご)から私の5年前の記憶を思い出してくれた。そして再び私はこの男との戦いが始まるらしんですけど、正直言って今どこに向かってるかがわかりません。

「あのさ、どこ行ってるわけ？」

「さっきから質問ばっかだよな、まあいいけどさ、これから俺んちに行ってもらうよ。いろいろ準備するものがあるしさ。」なんで事前に用意しなかったんだろう。

思えば、さっき友達を離れて何時間経ったのだろうか。てか今何時すらわかんないし、ここがどこだかもわからない。高校生16歳の女の子が、5年経ってるから25歳だっけ、そんな男と歩いてるって、絶対なんか誤解されそうで怖い。こんなタイミングで警察でも来たら…

「お、警察だ」何なのこのタイミングは！！

その警官は何も言わないですっと通り過ぎていった。まあ当たり前だけどね。カップルと思われなかっただろう。私この人よく知らないし、まあ兄妹って見られていたとしたら、なんかそれはそれでいやだ。

「さて、疲れたからタクシーでも使おうぜ」
「なんで今まで使わなかったの！！！」いままで歩いていた無駄な時間を返してよ。ねえ、３０分くらい歩いてたよね。なんでここでタクシー使うかな。
「お前と歩くと、兄妹って思われそうで、なんかいやだ」それ私の台詞なんですけど。微妙に笑ってるし…、もう帰ろうかと思ったけど、さっきあんなこと言っちゃったからしょうがないか。
っとおとなしくタクシーに乗った私は１０分くらいで大道（こいつ）の家に到着した。
家は5年前と比べて新しくなっていた。というよりも外装とかは変わってなくて、なんだろ新しさが感じられた。というのもあの時は真っ暗で、何色など外装など覚えてはいない。
「さてと、まあ上がってよ」と広い玄関にいた。なんか中は和風でもなく洋風でもなくまあ普通だった。マジで普通だった。
「お、お邪魔します」とかたくなに緊張している風に見せた。なんでかって？こうしておいたらボケがこないからである。
「さてと、まあゆっくりしていって」
「あ、はい」
「お茶とかとってくるな、お茶でいいか？それともなんか」と気を使ってくれた。
「なら、お茶でいいです。あ、そこまで気を使わなくても結構です」睡眠薬飲まされそうだ。
「ＯＫＯＫ、なら待っててくれよ」
と待たされたところは、茶室というよりなんだろお客様をもてなすところな部屋だった。畳のいい香りがした。暇だったから部屋の中を見て回った。失礼すぎるやつだな私。
5分位して返ってきた。麦茶だった。
「他の人とかは？ご家族とか」
「ああ、ここは俺の家だよ」
「はい？」どういうこと

「だから、ここ俺の家ってこと、まあ家賃とかそういった難しいことは親に頼んでるんだけど、まあいわゆる1人暮らしってことかな」
なんたるブルジョワ人だ。こんなでかい家で一人暮らしで？しかもいやは超裕福っでことですか。通りで巫女探しとか悠々にできたわけだ。待ってよ、ということは今この家には私とこの変態しかいないわけで。…私が危ないなこれは、そっこう逃げなくては、どんな目に合わされるか。わかったようなもんじゃない。
「何帰ろうとしてんの？大丈夫だ。ちゃんとメイドさんもいるし、そんなちんちくりんに手は出さないっての」
「まるで私が何を考えていたかわかったような言い草ですね」
「まあ、馬鹿の考えることはすぐわかるからね」
今馬鹿って言いました？この男にだけは言われたくはなかった台詞の中で第2位である。
「ふんだ。この前にテストなんか３００人中１９６番だったんだから」
我ながら中途半端な点数だな。自慢にもならなかった。でもこの男はこういった。
「ぷっふ、お前そんなんでそく自慢できるな。まあ俺よりはいいじゃん。俺は１００人中７６だしさ」１００人中ということは3かけて２２８かあ、まあ下だね。
「確かに頭悪そうだもんね」
「でも学校はお前その制服松高だろ、松本高等学校、あそこ馬鹿高だろ！」
ならあんたはどこ高だよ！松高なめんな！
「俺？宇土高だよ、宇土冥団大学高等学校だよ。どうだ」
負けたあそこは偏差値めちゃくちゃ高いんだったっけ。よく受かったなこの変態。とこんな話をしている場合じゃなかった。
「じゃあ本題いってよ」
「ああいいぜ、というかお前が話し振ってきただろうが」

あれ？そうだったっけ、まあいいや
「いいから続けてよ」
「ああ、まだ本題言ってないんだけど。まあ5年前のような儀式とは違って。本契約みたいなもんだ。まあいわゆるこの力を受け継いでもらうものかな」
「っで何をすればいいの？」と可愛く見せようと首をかしげて目をきらり～ん、特に意味はない
「ああ、この勾玉ね。はいお前のやつ」
5年前から何も変わっていなかったこの勾玉はまたこの感触がしていた。『生きている』と、
「あと巫女の衣装なんだけど、あれじゃないと力は本当には発揮できないんだよね。あれもさ一応生きてるし」
それは5年前の感じました。生きているという感じはよく伝わった。あの赤い衣装結構可愛いんだよね。
「じゃあちょっと脱いで」と真剣に言った。逆にきもかった、だから殴った。
「痛いじゃないか、この貧乳が」
「貧は貧でも気品の品だ。ばーか」ともう一発殴ろうとしたらとしたら止められた。
「違うっての、儀式だよ。ちゃんとしたね。ああ、俺見ないからさ、さっさとやっちまえよ。儀式したら。戦闘服である巫女服も術で着れるようになるからさ」
その機能、学校行くときに欲しいな、術を唱えれるだけで、着替えができて遅刻はしない。これって便利だよね。
「変な妄想してないで、早くやれよ。ほら見てないからさ」
別に疑ってるわけじゃないんだけどさ。こいつに見られてもなんの得にもならない。そして脱いでいった。まあ現在ほぼ全裸ですよ。恥ずかしすぎるっての
「っでどうすればいいの」
「勾玉に念じろ。そうすりゃ契約完了だ」

「わかったやってみる」
そして勾玉に念じてみた。
（こんにちは勾玉さん）
（はい、私はあなたのパートナーの赤の勾玉です）
（話せるんですか！？）
（はい、５年ぶりですね、契約すれば自然と内緒話可能です）と
この勾玉はおっとりした性格だった。赤の勾玉なら情熱系かなと思
っていたが、まあいいやどうでも
（契約ってどうすればいいんですか？）
（簡単です。私の言うことにただうんといえばいいことですよ）
割と簡単だったので同意した。
（では、はじめますね。以下宮本佳奈（みやもとかな）は赤の巫女（レッドミディアム）としての力を受
け継ぎ、そして私とともに戦うことを志、そしてこの力をいい方向
に導くことを誓えますか？）
（うん誓うよ、そのために今ここにいるんだもん）
（契約完了です。話したいときはいつでも念じてくださいね、佳
奈、これからもよろしくね）
（こちらこそ、赤い勾玉もよろしくね）
（アカマガで結構です）
なんという略し方なんだろう、まあ呼びやすいからいいけど
（じゃあ、改めて、アカマガちゃん、よろしくね）
（はい）
と私は契約完了した。
「お、契約完了したか」と変態がこっちを向いた。
もちろん私は全裸だった。
「こんの変態がああああああああああああ！！！！！！
！！！！」
変態をかなり殴っていた。
「というかお前服着ろ服を」
「ああ、うん」少々というよりもかなり恥ずかしかった。

と、ようやく着替えた。
「今日はすまんかった」と賢吾は謝っていた。
「まあいいけど」つーんとした顔で言った。そして私はタクシーに乗っていた。この男が呼んだのだ。遅くなったから、
「これタクシー代な、ああ返さなくていいから」といかにもお金持ちの台詞をはいた。
と私は無事に家に帰った。
「今何時だと思うんだ？」
その後お父さんに怒られた。帰ったのは８時前だった。高校生だからいいじゃん。ということはできなかった。もちろん今日あったことは秘密で、言い訳は、カラオケして、ゲーセンいったらいつの間にか寝ていて遅くなった。といってごまかした。
翌日、登校したら。友達の美希が欠席だった。聞いたら
「美希、行方不明らしい、まあ詳しいことはわからんが、知っているやつがいたら教えてくれ、最後にお前が一緒にいたんだろ」と先生に昼呼び出された。
行方がわからなくなったのは、私とはぐれてすぐで、ちょうどそのとき、大道賢吾と話していたときだった。
「わかったことがあれば教えてくれよ、お前が頼りだぞ佳奈！」
この男教師は全国先生といって変わった名前である。よく生徒を名前で呼ぶ変わった先生だが。人気はあった。私はあまり好きではないけど、こういうタイプ。
とりあえず「はい、わかりました」とだけ言っておいた。といか全国先生っていつからいたっけ…

それからすぐに彼の元に行った。なんでかって？それは
「教えてよ闇族のこと」
「ああ？いいけど、何？やる気出てきた？」
「まあ、なんとなく」とごまかすように言った。本当はもしかしたらでよかった。

「じゃあ、基本的なことからだな、闇族って言うのは簡単に言えば人を抹殺する殺人兵団なんだけど、まあ実は宇宙からの侵略者でもあるんだよね。古代に眠っていたはずなんだけど、それも期限が5年前のあの日についたみたいで、それがいっせいに開放したってことかな、今はあのとき”オールデリート”の完全抹消でなかったことになって、なんとか俺達が時間稼いで、徐々にだけど開放しちゃったんだよね。それでまた巫女探ししてるんだけどね。ああ話しずれちゃったな」

わたしは「はい」とか「ああ」とか「はあ」とかしか言わなかった。で続き

「っで闇族に殺された人間は遺体は残らない。抹消というよりも、存在そのものが消えてなくなってしまうんだ。人々からその人に記憶が消えてしまうんだ。殺されるところを見た人間以外ね。闇族はその存在をエネルギーにして自らのなんというか、力にしたりするんだ。あと傷の手当とかもそうだな」

「人間が殺されずに、何かの目的で誘拐してるってことってあるかな？」

そう私は美希（みき）が関係しているのではないかと考えた。まだ人々から記憶があるってことは殺されてはいないことになっている。

「そうだな。ないともいえないな。でも実例がないからな～、俺もそこは言えないな、でもそんな賢いやつもいるかもしれないな。あいつら俺ら人間と同じで脳みたいなやつもってて進化することができるからさ。これまたやっかいなんだけどね」

っと話は流れて、最終的には彼の闇族との戦いのエピソードを長々聞かされた。ほとんど逃げている話が多かった。

「っでまあそういうことだな」

といわれても自分の体験話聞かせれても説明部分は前半だけだったれども…

「大変だったんですね」

いつこの人が死んでもおかしくはない状態だったということだけ

はわかった。私は何もとりえのない女の子だったけれど、何か彼のためにできると思うと楽しくなってきた。こんな気持ちは初めてだ。わくわくしたような気持ちだった。

「じゃあ、行くね」

「ああまた明日な」明日って…、私またここに来なくちゃならないの？今日は用というか聞きたいことがあったから来たんだけれどな～、まあいいかな。

「うんわかった。また明日」

次の日

学校では美希(みき)が亡くなったということがわかった。

全国先生(ぜんこくせんせい)も何も言わなかった。そして、クラスの誰もが誰か死んだ何て覚えてはいなかった。一番衝撃的だったことは、靴箱の名前と机が変わっていた。そこには私の知らない子がいた。一瞬転校生かと思ったけれど、最初からいたらしい。名簿も４月からになっていた。

学校が終わり、彼の元に走った。

「闇族によって死んだ人間って存在そのものが消えるんだよね」

「ああ周りには記憶すらなくなる。家族も友達もな」

ならなんで私には美希(みき)に記憶が残ってるんだろう。

「機能から熱心に聞いてくるけれど、誰か死んだのか？ならお前には記憶は残るさ、巫女(みこ)って言うのは特別な存在だから、別に死ぬとこと見なくても記憶にはちゃんと残るようになってるんだ。そういう力だからさ。だからお前は５年前の記憶がぼんやりだったけれどあったじゃねーか」

だとすれば、本当に美希は死んだということだ。

「うわああああああああああああああああああああああああああああああああああああ」

私は泣き叫んだ。恥ずかしいくらい、近所に聞こえそうだくらい叫んだ。あんなに一緒だった。美希(みき)が闇族によって殺されたのだ。

しかも覚えてるのは私だけ、状況がわかって初めて、死というものを実感すると怖くて、泣き叫ぶくらい悲しくて、自分には力があるのに守れなかった自分が悔しかった。
「おい、大丈夫か？ほれハンカチ、ってこれポケットティッシュだ。まあいいや、はい」
私はティッシュで涙を拭き、鼻をかんだ。
「泣きたい気持ちはわかるけれどさ、ちょっと状況説明してくれないか？」
私は彼に、今ある状況を説明した。泣きながら
「なるほどな、それはおそらく闇族だな、おそらくお前と別れたときに襲われたに違いないな」
真剣に考えてくれていると少し安心した。まあ真顔が俺は真剣に考えてるぜ！って感じだった。私この人基本見下してるからこのときは少し感心した。
「じゃあちょっとあれ使ってみるか」
「あれって？」
「んっーとな～、ある意味探索機かな」
「探索機？」
それは5年前に入った部屋の奥の方にあった部屋にあった。
「私たちの県内じゃないですか」
私は目を見張った。PC上に地図の機能は知っていたけれど、明らかに違っていた。本当に探索機だった。
「俺がソフト使って作ったんだけれど、昔までは人雇って調査してたんだけれど、こっちの方がお得なんでね」
そういえばあなたはお金持ちでしたね。
「じゃ～見つけてみるけれど、やっぱり反応しないな～」
「なんで？」
「そりゃ普段は隠れてるからさ、人間に化けてるからね」
「あ～」
そういえば薄っすらだけれど、この人から、「闇族は人に化けて

生活してるんだ。目印は腹とかへその近くに闇って書いてあるんだけれどね。ほら俺にはない、君にもないでしょ」っと腹を見せてきて、私を脱がそうとした。もちろん殴ったけれど。

「でも、闇族も２４時間闇族も化けれるわけじゃない。そりゃ力を使ってるんだから、疲れが出る。それがこのＰＣにセンサーとしてでてくるってわけなんだよ。何回もこれで感知してるんだぜ。」っで出動しては逃げていたってことですか。

「じゃあさ私が、町にでてればいいじゃん」

「まあそうだな、連絡手段として、携帯はあるか？」

一応高校生だからあるんだけれど…、と仕方なく彼にメルアド教えた。不覚だった。ああいやいや、いやだ。気分悪いな～。でも仕方ないか。

「じゃあ１時間位したら戻るね」

「ああ、俺も発見できたら連絡するな」

思ったけれど、あんなマシン作って、町を監視してるって犯罪じゃないのだろうか？このこと私はまだ彼がこの町を仕切っている人の子供が彼とは知らなかった。としてもプライバシーというものが人それぞれに存在するから…、面倒だから今度にすることにした。

という訳で町に出た。っで何もすることがないから、

「暇だな～」とコンビニで立ち読みしていた。まあいわゆるサボリというか、歩いていてもつまらなかったそれだけだからね。サボリじゃないからね！！

というか、巫女だから感知はできないのだろうか？勾玉のなんだったけー、えっとアカマガだ！

（巫女って感知できないの？）

と念じてみた。

（ああ感知ね、時々いるけれど、それは感知タイプと言って特殊な人しか使えないのよ～例えば霊感がある人が多いかな～）と相変わらずゆっくりと話す御人だこと。まあ落ち着けるところがすごいけど。

（わかった。ありがとうねアカマガ！）
（はい、また話しかけてくださいね～、じゃあ寝ますねおやすみなさい）
おいおい、まだ夜じゃないですよー、昼寝ですか？
という訳で何もなく無駄な時間を過ごした。
「はあ～、まあ今日はこんなもんだろうな、じゃあまた明日な」
「うんまた明日ね」
いろいろ知った日だったな。昨日よりは少なかったけれど。最近何かと疲れる。そこまで疲れることではないけれど、体力面ではね。精神的に来るものはあったから、親友というかまあ親友の死とか再会する彼とか、最近いろいろ疲れる。これから私はどうなってしまうんだろうか。その不安もあってか疲れていた。っでこんなことが
「佳奈さ～あんた彼氏とかできた？」とお母さんが言った。と言っても現在パリで仕事しているのでテレビ電話でのパソコン上で会話していた。まあお父さんは風呂に入っていてまだでてこない。まあ風呂では音楽聴いてるし、上がったら上がったでそのままビールをおつまみと一緒に自室でテレビを見ながら飲むのがお父さんの１日の一番楽しみな時間。そして私がお母さんと話せる時間でもある。
「いないよ彼氏なんて」
「だって最近帰りがいつもより遅いらしいじゃない、それに最近ため息とか多くなった。とか携帯をよく見るようになったとかお父さんが言ってたわよ。泣きながら」あの父はどれだけ娘がすきなんだ。
「まあいろいろね」
「な～に？隠し事？あんたただでさえ友達作れないんだから、まあ心配はしないけどさ。お父さんあんまり泣かせないでよ。超心細い人なんだからさ」
それはわかっているよ。１７年も一緒だからね。
「うん。ところでさ、次はいつ帰ってこれる？」
「う～んとね…」そんなことがあった。

最近帰りが遅い理由は、彼（彼といってももちろん彼氏ではない）、大道賢吾のとこに行ってるからだ。
っで今も、
「闇族見つかった？」
「いや、昨日から全然反応がない」
それはおかしいとのこと。大抵1日に1回は反応があるらしい。
「どこかこの町から離れたところから姿をくらませてるのかもな。まあ一応そっちも調べたが、行くにしても車で３０分くらいあるところだ。」
そうなったら帰る時間が遅くなり、まあ終いには外室禁止を受けるかもしれないことになってしまう。」
「まあ一応行ってみる？」でも見過ごしてはおけなかった。
そしたら
「あ、反応だ！」
ＰＣ上に緑のランプらしきものが光っていた。
「近いぞ、ここから徒歩で5分くらいのコンビニから右に行ったら駅で列車に乗ってすぐのとこだ」
どこやねん
「あれ？ギャグ通じない？まあいいや、そこのコンビニだよ。このデータをこっちにノートの方に移してっと、よしいくぞ、”赤い巫女”さん」
5年前のあの走った記憶が思い出す。彼と走ったあの道のこと、忘れない。あの怖すぎた道のことは。
「あれ？おっかしいな。コンビニに反応があったんだがな～」
っと5分でコンビニについていた。するとコンビニに全国先生の姿があった。なにしてたかというと、本コーナーでエロ本の立ち読みを堂々としていた。
「俺はこっち行くからさ、何かあったら携帯で。お前はここに残ってくれ。ああコンビニであの変態やろうのとこに行ってもいいぜ」

と賢吾さんは全国先生を指差した。
「はいはいわかったからさっさと行っちゃってよ」
「気をつけろよ」
そっちもね。ただ逃げるだけだろうけどね。
と私はコンビに入った。まあ全国先生はあまり好きではなかったので、からかおうとまあ悪い生徒ですいませんね。
「せ～んせ～、こんにちは、偶然ですね。何読んでるんですか？」
「うわって、ああ佳奈か」
あいからわらず生徒を呼び捨てて呼ぶんですね。名前を。でも親しみやすさで結構評判いいからまあいいかな。
「はい、立ち読みですか？」
「ま、まあな、ははは」とエロ本を後ろに隠した。でもコーナーの前にいるのでバレバレである。
っで一息ついて先生はこう言った。
「いいか、佳奈！先生も男だ」
わけのわからないことを言い出した。
「だから私もここでエロ本を立ち読みしている。わかるな」
わからないよ。何で買わないの？てか私を襲うんですか？それでわからないままで
「はいわかりました」
「おまえわかってないだろ」
何で先生がこんなこと言ったかと言うと、私が携帯で写真をエロ本コーナーにいる前にいる先生を撮ろうとしていたからだ。
「はい、堂々とエロ本を立ちよみしている先生を撮って、それでＷｅｂ配信すればいいんですよね？」
もちろんわざと言ってます。毎回宿題多いんだもん。たまには仕返ししても悪くはあるまい。
「やめろってもう」
「ははは」
完全先生をなめていた。そのときだった。

「そういえば君は親友であった美希ちゃんのことはどうでもいいのかな？」
はい？何で先生が知ってるの？でもそれより先生いじくるのが楽しかった。だからかな油断してた。
「私だよ。彼女を殺したのは、そして次は君だよ。佳奈ちゃんよおおおおおおおおおおお」
ふっと我に返って先生を見た。
そしたら5年前私が襲われそうだ闇族の姿だった。そしたら携帯がなった。
「おい！今そこにいるんだろ！気をつけろ。そいつ結構やばいぞ」
「やばいって？」
まさか先生、全国先生が闇族だったなんてくらいしか今頭にはなかった。
「今そっちに向かってる」
どこまで行ったんだかあの大道さんは、
「死んでもらおうかな、私はね～君みたいな生徒が大嫌いでね。特に全然私に好意を持ってない生徒はね」
かなり危険な状態だった。まあコンビニの窓ガラスは割れていた。いろいろやばかった。下手すりゃ警察で御用だ。まだ今日のドラマ見てないのに。もう大道はまだなのか。
っとアカマガが話しかけてきた。念じてもないのに
（戦うしかありませんね）
（戦うって行ってもどうすればいいの？また5年前みたいにするの？）
（いいえ。即効変身です（キリッ））
（はい？）
（あれあれ？わかりませんか。言葉がわからないんですね。チェンジミデアム！！といってくだされば結構ですよ）
（なんですか？一気にテンションが上がったみたいですよ）
（早くしないと死にますよ）

そんな話し方だと余計安心しちゃうよ、っとそこに
「おい！大丈夫か？俺が来たぜ」
「遅いよ大道！」
まったくどこまで行ったんだか。
彼は全身葉っぱとかいろいろ土だとかで汚れていた。本当にお金持ちの坊ちゃんなんだろうかと思ってしまうほどの格好だった。
「ミデアムチャンジだ」
あああなたも言うんですね。これも運命英語で言えばデステニーだったっけ？まあいいや
「はいはい、じゃあ”チェンジ　ミデアム”」
私はあの赤い巫女へと衣装が変わってしまった。つまりは
（変身完了ですね）
まあそういうことだ
「おいおい何なんだその格好は、えー？なに佳奈は俺をそんなことしてどうしたいわけ？」
先生が壊れてきたというか本性が出てきた。正直私もこの格好でどうしたいのかさっぱりだ。
「まあここじゃなんだ。戦闘に向いてないだろう。渋滞区外はやばいぞ」
大道はそういうが、先生をどうやって他のところに誘導すればいいかがわからない
（わたしにまかせてください）
（アカマガがやってくれるの？）
（はい。少し力お借りしますね）
といってなんか感じたような気がした。
「じゃあ俺もよろしくな、戦闘初めてだろ」
とこそこそ話していたら
「おい！佳奈！俺のことは無視してんのか？先生に対してとっていい態度ではないぞ！」
今あんたただの化け物だし、最初からこいつを先生と思ってなか

ったし。
（じゃあいきます。”テレポート”）
アカマガさん。そのまんまですね…術の名前が。

っと広い場所というか
「ここどこ？」
見渡す限り山とか崖？とかなんか見たことあるようなことだった。なぜなら大道がこう言ったからだ
「ああここは、よく特撮物では戦闘シーンで使うところだよ」
そんなところで戦うなんて、確実になんかアカマガ狙ってたんだろうな。
（いいでしょここ、頭にここが浮かんだんですよ）
浮かんだら来れるんだろうか？なら通学とかいろいろ買い物とかに便利だな。
とこんなこと考えていたら全国先生が
「おい！佳奈、きさま生徒の分際でこの俺をどこに転送しやがった」キレた
正直私もなんでアカマガがここを浮かんでいたんだろうか、特撮好きなのかな？
「あの男は相当人を殺してそうだな」
「そう見えるの？」
「いや闇族は人を殺すことでその位が変わるもんだ。おそらくあの教師は、生徒を殺すのが目的で学校に忍びこんでいたらしいな」
なるほどね。それでそんなくだらないことで美希は死んだんだ。
てかもう怒りじゃなくて、この教師殺さないと今度は私が狙われそうだ。
「おい、いちいちブツブツ言ってんじゃねーよ」
ホント、性格変わってるなー、学校とは大違いだ。例えるならネットで人格変わるようなものだろうか
「こんな姿見られてはもう俺はこの町では生きていけないんでね。

死んでもらおうか。２人とも」
「おいおい殺されるのはお前だぜ！！」
と大道が足ブルブルで言った。怖いなら隠れてればいいのに
「ならやってみろおおお」
先生がこっちに迫ってきた。
「おい！佳奈俺はあっちで逃げてるからアカマガにサポートしてもらえよ」
やっぱりこの男へたれだ。まあ邪魔しなくて済むし
（アカマガ、私はどうすればいい？）
（そうですね～、とりあえず暴力ですよ！打ったり蹴ったり）
なんかサポートじゃないよね。それ、転送する力あるのに
「何念じてるんだよ！」
「うわっ、危ないじゃん！」
もう少しで顔に傷が付くところだった。大きな鎌見たいのつけて、あれ一番あぶないじゃん。しまってよそれ
「おやおや、そんな程度なのか？逃げてばかりでは話にならないじゃないか」
といってもサポートが打ったり蹴ったりしろって言っても相手は鎌だし。正直危ないでしょ。
「逃げ足は速いやつめ、でも俺は狙った獲物は逃さないタイプでね。覚悟したまえよ」
地面がめり込むくらいの一撃が何度も何度もきた。
「もう走るのつらい」
（ならそうですね～。私からの贈り物として武器を贈呈しましょう）
あるなら早く出してよね。そういうの。
（ではいきます。この術です・・・）
（うんわかった、じゃあ）
”全力バズーカ、略して全バカ”
そして唱えたら光が舞い降りて中から、剣がでてきた。

「なんでバズーカっていったのに、剣が？」
（あはは、私流のジョーク呪文ですよ）
呪文て私は魔法少女か！！
「そんな剣で俺が殺せるものかぁ！」
ぶんぶん振ってくる鎌に剣では対抗しきれていなかった。
「このままじゃお陀仏ね」
（諦めてはいけません、まだ切り札はあります）
（それって5年前に使ったあの術？）
（それもありますが、その剣に名前をつけてください）
アカマガは何を言ってるんだろうか。まあいいか、ならこの剣の名前は・・・、そうだ！
「君はよそ見しててていいのかな？そこまで君は死にたいかあああ」
「この剣の名前は”全力バズーカ”だよ」
「はあ？」
（今です。この剣にすべての力を吸収させるのです）
「そんなこと言われてもどうすればいいのか、わかんないし」
「ごちゃごちゃ言ってんじゃねーよお、先生なめんじゃねえよ」
もう化け物になったやつを、先生と呼べるのであろうか。
なんとか力を剣にためた。
（やはりこの子には素質があったようですね）
（なんか言った？）
（いえ別に・・・）
「おい！大丈夫か？」
っげ、何で隠れてた大道はこの場面で出てくるかな？
「おお、あの男使える。あいつは何だ？佳奈の彼氏か？」
「違います！」
「そんなこと言ってると先生誤解しちゃうな～、適当に生徒にメールで写メだな。あっでも君たちは死ぬから無意味だったね」

そして私はかっちーんときて
「先生うざいよ」
先生の前に剣を振りかざしていた。
「なっ・・・」
「くらいなさい！”斬フレイム”」
「き、きれるうううううう」
やった？
「き・・・きさっま、このままではただで済むと思うなよ、この写メで・・・、適当にネットで・・・」
「まだ斬られたい？」
先生は半分切れた状態にいた。正直グロいかと思ったが、案外闇族から血とか出ないんだね。てか変な液体だ。白くてネバネバしていた。
「よっし、やっちまえー」
後ろから大道の声が聞こえた。ああもう何もかもうざい
「全国先生、ちょっと聞きたいんだけど」
「な、にかな」
もう怯えてるし
「美希（みき）を殺したのは先生？」
「ああ、殺したさ」
「他に殺した人は？」
「君みたいな僕に従わない問題児さ」
私は問題児じゃないんだけどな～。先生にとっては問題児ですか
「やるならやってくれ、さっきから痛くて痛くて仕方がないんだ」
闇族って案外頑丈だな～。人間ならさっきの技、一撃で即死だよね
（とどめを刺す必要はありませんよ。この男はそのうち爆発します）
アカマガさん、それ特撮の見すぎです。
「いいから早く」
「はいはい、怨みもあるし、さっさととどめいくね」

「やめろ！罠だあ」
ととどめ刺した後、大道からそんなことが聞こえた。
「なに？大道？」
「危険なにおいがする、って後ろだ後ろ」
「後ろ？」
そこには全国先生ではなく、得体に知れない大きな化け物がいた。
およそ5メートルの怪物だ
「第二現象、闇族の切り札”死に際の化け”だ」
（やっかいですね。結構これはやばいですよ）
「第2ラウンドってことかな」
と剣を前に突き出した。
「がんばれよ」
とりあえず大道には黙っててもらいたいかな。
「じゃあ、帰ったら、何か奢ってよね」
「じゃあ飯でも奢ってやるよ」
「それは楽しみだな、でもいいや。一緒に行きたくないし」
「そりゃ残念だ」
ああやるしかないか。
（では行きますよ。最終対決です）

まったくといって、攻撃が効いてなかった。やばいんじゃないかなこれ
「どうしよう、まったく効かないし、大道はアドバイスしなくてただがんばれって言ってるだけだし」
（あはは、）とアカマガは苦笑した。
（もう一度、力をこめましょう。今度はこの剣にではなく己自身に力をこめてください）
（うん、わかった）
（そして”全力バズーカ”の本当の力を見せなさい）
「じゃあその間」

大道にちょいちょいと指で合図した。
「なんだよ、俺になんか用か？」
作戦を言っておいた。
「わかったぜ、俺は必死に逃げてやるさ」
そうおとり作戦でその間私は力をためておくのだ。そのかわり大道が死の淵まで追いやられても知らないってことだ。
「じゃあ死んでね」
「いや死にたくないんだが、まあ俺に任せとけ」
と私は今まで大道が隠れていた岩に隠れて神経を集中していた。

「おい！聞け化け物、俺がこれから相手になってやるぜ」
化け物はうめくだけだった。
「いいぜ、俺が必死に逃げてやるぜ、言っておくが俺は逃げ足だけは速いぜ。せいぜい追いついてみろよ！」

5分後、疲れた大道が捕まった。

「助けてくれ～」
と力がたまった私は岩から出てきた。
（準備完了だけど大道が邪魔なんだけどさ、一緒にやっちゃっていいかな？）
（そうですね。彼には悪いですが、これが運命。彼の命日だったのですね）
「大道！」
「なんだ？早く助けてくれよー」
とそのとき私は”斬フレイム”の最大攻撃態勢に入った。
「おいおい何やってんだよ。俺を助けてくれよーー」
と敵の手にいた大道はじたばたしていた。
「捕まったあんたが悪い！」
はあと大道はため息をついた。諦めたのかな？でも本当に殺すつ

もりはない。アカマガとも冗談に決まっている。ちゃんと助けるつもりだけど、いまはどうして助かるか悩んでいた。
なにか隙があればいいんだけど
（もうそのまま攻撃しちゃいましょう）
（それしかないか）
もうアカマガと決めた。大道が死なないくらいの必殺技
「くらいなさい！先生」
”斬フレイム！バーストオオオオオオオオオオオオオオ”
さっきの”斬フレイム”とは比べものにならないくらい。でかい火だった。
（やっぱりこの子はすごいわ）
アカマガが言ったことがわからず私は倒れてしまった。もう疲れた。

気が付いたときは和式の畳の上で大道の家に来ていた。
隣には大道が寝ていたというか一緒！
（あら起きたのね）
（アカマガ！これは一体）
（あなたは犯されたんですよ、というかすごいものでしたよ）
ふふふとアカマガが笑っていたところを見るとアカマガがここまで運んでくれたのだろう
幸い大道にはやけどひとつなかった。あったといえば逃げたときの怪我だ。
「お疲れ大道、ちょっとはすごかったかも」
（まあ、キスですね）
（しないし）
（いえいえ、この場面では普通キスですよ。ほら寝ている状態で）
アカマガさんがノリノリで言っていた。若い子みたいなキャピキャピ感があった。

「まあ無事かえってこれてよかった」

その後大道が起きて、いろいろ言ってきた。
「俺になんてことをしてくれたんだ、超怖かったんだからな」
ビビリなことを主張してどうする。
「先生はもう存在していないことになっている」

翌日そのことを確認するべく職員室に
「あのすいません全国先生いませんか？」
「おいおいなんだその先生は、そんな教職いないぞ、ふざけてないでほら邪魔だよ」
本当に存在していなかったこととなっていた。

と大道家
「と言うわけだったんだよ」
あったことをそのまま話した
全国先生が消えたことを
と大道は何も表情を変えずにこう言った。
「まあこれが闇族と戦うってことだな」
これからのこと思うと正直不安だけど、アカマガがいて、大道がまあ一応入れていてくれるから今はまだ安心だ。
だがこれからが本当の戦いだった。なぜならまだ知らなかったのだ。私たちは
本当に闇族と戦うとはどういうことなのか。
そしてまだ見ない巫女（ミデアム）がいることを。

「あれがレッドミデアムねえ、たいして強そうじゃない子ね。クロマガ～」
（ああ、だな。そこまで強い気は感じられねえ）

とクスリと大道の家の前で笑う黒い髪の少女は言っていた。私たちは彼女の気配は気が付かなかった。

これからが始まり（後書き）

最後まで見てくれた方
本当にありがとうございます
自分の一生懸命書いているので
いいアドバイスがあるとうれしいです

新たなる巫女、黒い巫女（前書き）

へたくそですがみていってください

登場キャラクターは
宮本佳奈１６歳　高校２年
大道賢吾　２５歳　ニート
黒い巫女　１６歳
アカマガ
クロマガ
外国人
情報屋の子狐

新たなる巫女、黒い巫女

私の五年前
そう私黒目杏（くろめあんず）の５年前、私は家族の記憶から一部が消されていた。その記憶は巫女である私には残った。今でも、っであの事件を解決したやつは知っていた。５年前に当時１０歳くらいの少女がこの世界を救ったという。教えてくれたのは勾玉だった。

「私は、あの子より、強い」
私は黒目杏（くろめあんず）、”ブラックミデアム”の黒い巫女、”レッドミデアム”である宮本佳奈（みやもとかな）を暗殺しにきた。

「っでなんで大道はこんなことしてんの？」
そう大道がしていたのは、
「何って学校で待ってたのさ。いや～なつかしいぜ」
学校で待っていたのである。正直言ってストーカーではないかと思う。先生呼んでもいいレベルだね。これ。
そう大道が来たにはわけがあった。学校からおよそ１０分くらいにある。人気のない場所。で
「やっと見つけたぜ闇族」
「人間ん ちゃがなんかようかの？」
まるで子狐みたいな格好でいたのは闇族。
「童（わらわ）は、そう闇族ってやつじゃ、お主ら死にたいのか？魂ぬいたるで」
どうやら魂がぬけることができるやつらしい。全国先生の殺し方とは違う
「やつはヌケヌケってやつだ」
どうやらそのまんまの名前らしい。
「じゃあ一気に倒しちゃうよアカマガ！」

（ええ、ではいきますよ）
「じゃあ3・2・1で変身！巫女キターでいこうぜ！」
大道にはちょっと黙ってて欲しい。さっきも学校では本当は来てほしくなかった。同級生もいるのに明日からかれるじゃん。まあ今は友達いないからそこらへん安心かな
「なんじゃお主ら、また”巫女（ミデアム）”かの」
「またって？」
「さっきも童（わらわ）を狙ってきた黒いやつじゃ、ったく童（わらわ）はもう帰る！」
「あ、ちょっと・・・」
っと本当に子狐みたいに消えた。逃げ足だけは速いのかな。見た目は本当に普通に女の子だった。ちょっと幼女だった。大道はロリコンじゃないみたいだった。
でもひとつだけ気になる言葉があった。”黒いやつ”である。
「まさか。新しい巫女？」
ふと隣を見た。大道は考えているようにしていた。
「大道、あんた私以外にも巫女いないって言ってなかったっけ」
「ああでも黒い巫女なんて家にはない、あるのはお前の赤、他に青、緑、黄色とかだな」
でもそれだけじゃない。色って結構いるんだし、たぶん私以外の巫女もいっぱいいるに違いないと今感じられた。
たぶんあの闇族がここらへんにいたということはこの近辺にいるに違いないけど。
「一応、黒いやつのことは置いといて、さっきの闇族逃がしちゃったからさ。また明日ね大道」
「おお、俺も一応調べとくわ、じゃあまた明日な」
普通女の子は送っていくよね。まあ大道だからいいけどさ。また明日も会うとか疲れる。
一応アカマガは一緒にいる。いつ闇族がでてもいいようにだそうだ。

携帯のアドも交換している。
メールは最初はなんか盛り上がったけど、あとは
『今帰ったよ』
『ああ』
それだけである。

最近家族からも
「あんたさ～本当に彼氏できたんじゃない？」
とお母さんが食事中恋愛ドラマみながら言った。パリからの一時帰国である。
「ないない、それは絶対ないよ」
「だって最近あんた帰り遅いじゃない、友達もいないし。あんた見てくれは私に似て可愛いじゃない！最近猫耳とか着けなくなったしさ」
それはお母さんが勝手に買ってきて楽しんで私に着けただけだった。
「とりあえず彼氏はないよ。最近ゲーセンにいいのが入っただ～け」
「そう、つまんないの～」
とドラマに集中した。

「私の使命は宮本佳奈（みやもとかな）の暗殺、それだけよ」
（っか～、何年それ言うかね～、言っただろ、この町にいりゃ～会えるって）
（クロマガはやさしいね。でも私はドSよ）
（こりゃいいぜ、しごいてもらおうぜ、っとその前に戦闘開始だな）
（そのようね）
と黒い少女はある言葉を言って闇族は消滅した。

「なにさっきのきもい男は、消えればいいのに」
と微笑んだ。
「血祭りって最高ね」
（ギャハハハ、それは今言うことじゃねーだろ）
「そろそろ移動しましょう。こんな人気のないところずっといることないわ」
（まあそうだな。それも黒いけど、ここの雰囲気はもっと黒いぜ）
黒い髪の少女は黒い場所から光のあるところへ移動した。手をかざして光を遮断したようなことをした。
「今日も太陽がまぶしすぎるわ」
（それは当たり前じゃねえか）
とぼとぼと歩いている少女はまるで誰かを探しているような目で歩いていた。
彼女は暗殺者。ある人物を殺すためにいる存在。
なぜ彼女は宮本佳奈（みやもとかな）を暗殺しなくてはならないのか。それは5年前の話だ。

5年前
世界は闇族に支配されていた。
そう世界全国に闇族が攻めてきたのである。
そのころ佳奈と大道は運命的は出会いを果たしていた。そして黒目杏（めあんず）は・・・

闇族が攻めてくる前
杏（あんず）は、部屋で寝ていた。昨日徹夜で一生懸命にやっていたことがあった。
「もう大丈夫だからねクロマガ」
（おおすまねえな。おれっちもこればっかりはお前に頼むしかねえ）
クロマガの看病である。どうやら風邪を引いたらしい。

代々黒目家では巫女を受け継いでいた。そして杏(あんず)もまた受け継ぐこととなっていた。彼女はクロマガと出会ったのは幼少期。クロマガの口調に杏(あんず)はワンワン泣いていた。そりゃ幼女にその口はないだろう。でもそのあと

（悪かったな。でも俺はこうなんだ。俺さ、お前はいい巫女になると思うぜ）

当時の杏(あんず)には理解できなかったが

「クロマガ、今ではあの言葉理解できると思うよ」

（ああ？なんのことだ？）

「じゃあもう治ったなら寝るね」

だがそのときである。

サイレンみたいな音が鳴った。

「なに？なんか火事かな？」

（杏(あんず)！大変だ！闇だ。闇族がきやがった。まさかこんなことってあるのかよ）

「うそ、本当に？」

（ああ、マジだマジ、急いで外に出ろ）

と杏(あんず)は部屋を出て外へ出たときだった。

「キャー」

「ママ？どうしたの？」

「杏ちゃん早くよ。この家に妨害システムしたんだけど、その前に一匹いたみたい。はやく～」

階段降りたら、そこには闇族とフライパンで戦っていた。何故フライパンかというとそこらへんに散らばっているのはクレープに薄い生地。もちろんおやつである。

「まってママ、クロマガ初戦闘だけどいくよ」

（おう、任せろ！いっくぜ～）

「”チェンジ！ミデアム”」

と杏(あんず)は黒い巫女衣装に身を包んだ。

「考えていた台詞言うね」

（ああやっと言えるな～）
「闇をなすもの。私の前では効かないの、さあ力のみなぎるこの力、たんと見て消えなさい」
そっと瞬間移動して闇族に蹴りを一発。
「きさま～巫女か？ってことはそうか。この家には相当価値がありそうだな。潰す価値があるな」
「無駄よ」
「ママ！」
そうここに闇族は入ってこれない。妨害システムは最強だから。
「じゃあいくわ」
（おうこれだな）
「”バーストキャノン”チェック！、燃料チャージ。フルバースト！」
すさまじいビームが闇族を襲った。
「こんな俺がこんな小娘に負けるなんてな、さらばだ」
と闇族は消えていった。だがそのときだった。そう佳奈（かな）の”オールデリート”が始まったのである。
「なにこれ、消えていく。やめて、やめてこのままじゃこの家は、この家は」
気がつくと、杏（あんず）は真っ白い空間にいた。クロマガと、そしてすべてこの事件の発端は
「宮本佳奈（みやもとかな）・・・」
だと勘違いした。そう自分だけ違う世界の住人みたいになってしまった。
それが嫌で、家出もしてしまった。苦しい毎日をすごした。そんなある日
「そうか宮本佳奈（みやもとかな）って言うのが悪いんだ」
そう思い始めていた。そしてそれが今にいたるということだ。
単なる勘違いからである。
本当の5年前の事件は違う人物だったと知らずに・・・。

「私は必ず殺す。それがここまで私が生きてきた希望だからね」
（ああ俺は応援してるぜ）
彼女は今でも探しているのである。佳奈を。

そんな佳奈はというと。
「やっぱり出ないね。あの幼女」
「おいおい幼女言うなよ。言っておくが俺はロリコンじゃないぜ！」
私はあの時そう感じたよ。なに？あんたお姉さんキャラとかが好きなの？
「俺は巨乳なら何でもいいぜ、あと美人な」
ああそういうことか。ふと自分の胸を見た。やっぱり小さかった。
「っでそんなことはどうでもいいけどさ～、やっぱり反応ないよね～」
「ああ今のとこ遠くの地点でしかないな、出動してもすぐ消えちまうからな」
この人お金持ちなんだからヘリとか使えばいいのに。こういうとこで発揮しようよ。
っで今日も何もないということで
「じゃあまたね」
「おうまた明日な」
ここのところ毎日通ってる。なんだかもう習慣化してきてるのかな。今はそれはわからないけど
とそのとき門のところに黒い髪の女の子が立っていた。
私はお客さんかな？とでも思っていた。そうお客さんである。悪い意味で
「あの～なんか用ですか？」
「ええ、あなたにね！」
と「”チェンジ！ミデアム”」と言ってあの幼女子狐が言ってい

た黒い巫女であった。
「私は黒目杏（くろめあんず）、５年前の事件の首謀者であるあなたを殺しに来たものよ」
と少女は微笑んだ。
そのころ大道賢吾（だいどうけんご）は
「さあて、なんもでねえし、これ見とくのも目が疲れてきたし飯だな、飯！飯！、メイドさーん、なんか作ってくれない？」
とメイドさんがすっと、来た。どんだけの速さかと言うと、言うと１０秒以内で来てくれる。と言うのはうそでたまたま近くにいただけである。
「はい、麺類でよろしいでしょうか？」
「ああそうね。今はずるずるって感じがいいかな。じゃあとんこつでお願い」
「承知しました」
ある影響でこのメイドさんは承知しましたにはまっている。何の影響かはいえないけど・・・
「さて」と言いながらごろっと横になり。
「もし、巫女同士が協力するならいいけど敵同士になったりしたら大変だな」
そんなことを言っているときに戦いは繰り広げられていた。

「”全力バズーカ”！！」
あの剣のパワーをましての攻撃
「っふ、私にそんな攻撃、なめてるの？初心者ね」
二人は敵対していた。そんなわけもさっき

「あなたはいったいなに？」
「言ったでしょう、私はあなたを殺したいの。五年前の復讐に、私ができなかった復讐へ」

佳奈(かな)もアカマガも5年前という言葉で真剣な顔となった。
（どういうことでしょう、確かに巫女には影響あったりしました。ですがまさか5年前、巫女がいたなんて大道も知りませんでしたよ。それにあの黒い勾玉なんて聞いたこともありません）
「あんたが幼女の子狐が言ってた巫女ってわけだね」
「ああ、あの速い狐ちゃんね。でもあれは殺してはならないの。別にあれは人の魂を奪うだけ。肉体は残るわ、でも心は残ってないけど存在がないよりましでしょ。それにあれは情報屋よ」
訳がわからないことばっかり言ってる。大道でもこんなこと知らない情報である。理解できるわけがないし、それに相手は巫女だから味方のはずの巫女なのに敵だという。アカマガも混乱している。だからもうやることはひとつしかないってことである。
「あら、戦う気になったかしら。では私も”チェンジ　ミデアム”」
黒目杏(くろめあんず)はクロマガのおかげで巫女(ミデアム)に変身した。そう黒い巫女”ブラックミデアム”である。
「黒い！」
（黒いですね）
（ぎゃはははは、そりゃそうだろアカマガさんよお！）
（誰ですかこのチャラ男は）
「あ、アカマガ？」
「そうしたの？あなたは変身しないのね。だったら簡単よ。簡単に殺せるから」
ちょっとなめられていた。だからかな。ちょっとかちーんときてしまった。だから
「戦うよ。正々堂々”チェンジ　ミデアム”！」
「戦闘開始かしらね、じゃあ”キング　チェーンソー”」
黒目杏(くろめあんず)は金ぴかなチェンソーを持っていた。
うわ～物騒だな～
（アカマガどうすればいい？）

（・・・）
（アカマガ？）
（チャラ男の相手は疲れました。どうぞ戦ってください）
もう投げ捨てた。いったい何があったのだろうか。それはどうでもいい
「わかったよ」
「よけないでね」
っと鋭い手先でそのチェンソーをぶんぶん器用に攻撃し続けた。
アブなっ
「”全力バズーカ”！！」
あの剣のパワーをましての攻撃
「っふ、私のそんな攻撃、なめてるの？初心者ね」
全然効いてなかったというか当たってなかった。相手はかなりのパワーを感じた。このままではやられてしまうんじゃないかと感じたが、
「私は負けない。なんで私は殺されなくちゃならないか。知りたい」
「とぼけてんじゃねえ！！！」
っとそんなさっきまであんな声だったのにびっくりしてしまった。それで距離をとった。
「あなたは5年前したことでしょう、なんでなんでそんなことが言えるの」
私は固まってしまった。だって相手が泣いていたからである。これにはどうしようもない。
（おい！泣いてたら隙ができるぞ。せっかく目標の相手がいるっていうのにてめーは、しかたねえ、仕切りなおしだ。出直すぞ）
「ええクロマガごめんね。じゃあ私はここでひくわね。命拾いしたわね」
っと飛んで一瞬にして消えていた。さてさて結構なことが起こってしまった。新しい巫女が宿敵になtってしまった。

っで今は困っていることに
「ここどこだろ」
完全道に迷っていた。そう戦っていて完全にどこにいるのかわからなくなってしまった。だから携帯で大道に連絡して連れてきてもらった。
「お前何やってんだよ。まったく俺がここらへん知ってたからいいものの」
「あはは、ごめんごめん」
「それだけじゃねえ、勝手に戦いやがって、死んでたらどうするんだよ」
「あ…、ごめん…」
ととぼとぼと二人で歩いていた。大道の家までだ。そうそのわけは
「見つけたぜ、あの黒い巫女のことがさ。黒目家といって代々巫女を受け継いできた一族でさ、俺の家にも知らされてなくて、まあ古い書籍にでてきたんだけどさ。昔はあれだ。一緒に戦ってきて一番強い霊力をもっていたという説もある。まあ5年前に怨みもつのも当然だな」
大道の最後に一言でさっきの黒目杏(くろめあんず)の言ったこと、それを聞きたかった。
「ねえ何で5年前に起こった出来事って私も知らないことってあるの？」
「ああ？まあな。お前の”オールデリート”はすべてのことをなかったことにする術だ。だから闇族も俺達一族で徐々に封印をとかせているんだけどな。でもお前たち巫女には記憶は残っているんだ。だから俺もお前も記憶が残っている。俺は一族だし”オールデリート”見てたからな。でも黒目家は訳が違うだろ」
「なんで？わかんないんだけど」
「ああ、えっとだな～。黒目家は代々巫女を受け継いでるのは言ったよな」
「うん」

（ていうか今起きました）
（アカマガ今大事な話してるから）
（告白ですか。これは失礼しました）
（いや違うって）
と知らん振りみたいな態度をとっていたから
「おい、お前聞いてんの？」
「ああごめんアカマガが」
「はいよ、だったら続き行くぜ、その黒目家も全員記憶が残るはずだったんだが、おそらく防御システムかなんか貼ってたんだろ。それと”オールデリート”が重なって闇族が攻めてきたとかいろいろな記憶がなくなって、おそらく彼女だけが取り残された存在になって家族と上手くいかなくなった。もしかしたらその5年前起こってしまった封印を解いたのがお前って疑ってんだろ」
単なる勘違いかもしれない。だとするとそれは誤解を解けばいいってことだとわかった。だがそれで上手く収まるかは今の私にはわからなかった。だって恨みって言うのは一生残っていくかもしれないし。ここまで生きてきたのは私への復讐だし。どうしればいいのかわからなかった。それに本当の5年前の事件の首謀者が気になった。おそらく大道も知らないだろう。
「じゃあこれだけだ。まあ何か考えてる顔だから。家で考えとけ。また明日な」
「うん、じゃあまた明日」
これから今考えなくてはならないのは私にとってもあの黒目家の巫女にとっても重要なことだと思うから真剣にじっくり考えなくてはいけない。それは重々わかった。
家に帰ってもそればっかり考えていた。お母さんもパリへ帰ってしまってまたパソコンでも会話となってしまった。
「あらあら～そんな真剣な顔して～彼氏とでもけんかした？」
「だからお母さん、私彼氏なんていないって言ってるじゃん」
と暗い感じで言ってしまった。

「そんな暗いと２４時間お父さんがストーカーやっちゃうぞ」
「はあ～、今日はじゃあね。また明日」
「待ちなさい佳奈」
と真剣な顔でお母さんは言った。
「あんたが何で悩んでいるのかはわかんないけどさ、でもこれだけは言えるよ。それを決めるのは佳奈だけだよ。決断も何もかも決めるのは佳奈。それだけは言えるよ。じゃあがんばってね」
なんとも何か知っているような言い方をしていた。とお父さんがお風呂から上がってきた。
「ぶわ～佳奈～上がったから入りなさい。パパのあとでごめんな。この前まで一緒に入って・・・ごふっ」
と余計な一言を言ったので腹についパンチをしてしまった。
「ああお父さんごめん」
「あっはっは、これも愛の無知だね。でも結構いいパンチだったよ」
にっこりとして倒れる振りをいして
「パパはもうだめだ。パパがいなくても一人で生きているんだよ。バタリ」
ほっといてお風呂に入りにいった。その後お父さんは1時間その状態でじっとしていた。
そしてつらくなったのか、自然とベットに戻ったらしい。
お風呂の中でも考えはまとまらなかった。
私が彼女にできること、言えることは何なんだろうか。そればっかり考えていたせいで、全然寝れなかった。正直現在眠い。

っと大道の家に行った。
「おいおい、お前目の舌にくまできてるぞ。なんだ?寝不足か?」
「そういう大道だって眠そうじゃない?」
お互い昨日の出来事で眠れなかったのだ。そして
「おお!闇族反応だ。この近くだ。眠いけど行くぞ」

「ああ眠い。授業中ほぼ全部寝ちゃったよ」
これで授業態度は悪悪だね。絶対。
そして走ってその闇族のところまで急いだ。
（アカマガどこらへん？）
（そうですね～。ああああそこです）
アカマガがさしていた先には
「おお、あの幼女子狐か」
「なんじゃ？また御主らかの？」
そうあの幼女子狐、速くて魂奪って、そんでもって情報屋
ちょうどいいかな。と思っていた。
「ねえちょっと教えてほしいことがあるんだけどさ。あんた情報屋でしょ」
「ああ、そうじゃが。なんじゃ？今すぐ殺さぬというのであれば、その情報答えてやってもよいぞ」
まあ妥当な意見だ。速いからまあ倒すこととか無理だと思うから。これを言うだけでも、聞いてもらえるだけでもいいから。言った。
「5年前の首謀者を教えてよ。あの事件のさ」
「ああああれか、悪いがそれはお主自身で見つけろ、わてはここからは言えません。でも男でグラサンで結構身長高いのが目印だ。」
ある意味重要な回答だった。
これで首謀者探さないといけないなと思ったときだった。
「ああ、逃げちまったな、でもあいつはいいんだな。倒さなくても」
「一応、情報屋だし」
（私もあれはまだ殺さない方がよろしい方がいいと思いますよ。今は様子を見ましょう。黒目家の方も殺さない方向でしたし）
そんな感じで、あの情報屋子狐ちゃんはまだ利用できる。そうだと思った。って、5年前のあの事件が余計いろいろ知らなくてはいけないことがわかった。
「じゃあ、帰るか」

「そうだね」
また明日。それっていい言葉だと思ったのがあとの話である。
黒目杏(くろめあんず)が住んでいるマンション
「きっと、きっと今度こそ彼女を倒して見せるわ」
（ぎゃははは、それはいいんだが、そのあとおめえはどうするんだ？）
「知らないわ、私は復讐のためだけに生まれたのよ。それあとはそうねえ。死ぬのもこっけいでいいわね」
（そうか、じゃあこの話は終わりだ。お前は感情を出しすぎて時々ピンチになっちまう）
「ええ気をつけるわ」
と杏は微笑んでいた。だがその中には悲しそうで寂しそうな顔があった。それは何か忘れていて、自分の生きている意味を忘れているかのような笑顔だった。彼女はまだ、わかってはいなかった。自分があるべき姿を、知るべき真実を、そうクロマガですらわからないことだった。
「私はね。それだけで充分よ。欲を言えばそうね。もう一度家族になりたかったわね。元の・・・」
遠くを窓から見つめている様子は本当に寂しそうな表情だった。それを見ていたクロマガはもう何も言うことはなかった。
彼女の夜は更けていった。

そして大道と佳奈達はというと、
「っで、お前はあの少女の勘違いをどうやってわからせるんだ？」
「うん、ちょっと考えてたんだけどね」
どう見てもちょっと考えたどころではなく、結構悩んでいた顔だった。
それを見た大道は
「それでお前の答えは？」

その答えを聞いていた。顔は真剣で冗談はなし、という空気だ。
「私の答えは・・・、とにかく当たってみる。心で感じて真実を知ってもらいたい」
「そうか、なら俺はそれに協力するしかないな」
えっ、という顔で佳奈は大道の顔をじっと見た。
「だって俺は大道家だぜ、それくらいは当たり前だ」
だよね～、ていうかそうに違いないしね
そう思いながら笑っていた。久々笑ったかもしれない。彼女のことを考えて、5年前の真実を考えて、頭の悪い私には悩んだ。そしてずっと考えてた。っで今答えが出た。
黒目杏（くろめあんず）とは心で当たって、5年前のことはきっと探してみせると首謀者を。
だから佳奈の顔は、成長した顔になっていた。
（いい顔ですよ。佳奈）
（ええ～、ありがとね）
照れながらアカマガに言った。

5年前の事件、それは誰にとっても重要な事件、それを無視することはできない。
だからこそ
「とにかくあの子に会ってみる。今できることはそれだけだからさ」
「おう、じゃあ俺はＰＣで連絡だな、絶対お前の気持ち、伝えろよ”レッドミデアム”」
大道はとっととＰＣ室へと向かっていった。そして佳奈は黒い巫女”ブラックミデアム”黒目杏（くろめあんず）の元へと走っていった。もう迷うことはない。決めたことを今一生懸命やる。それがいまやるべきことだ。
そして杏は

「私は、きっと殺せるわ、今度は迷うことはない。首謀者の彼女を始末するのが私の人生よ」
（おいおい杏よ～、その台詞何回目だ？俺はもう聞き飽きたぜ。お前、本当は何考えてんだ？）
「私は・・・、そうね、第2の人生かしらね」
そんなふとした嘘の笑顔を見せた。だがクロマガにはそれが作り笑顔だとすぐに気が付いた。だから何も言えなかった。杏がかわいそうに見えたからだ。
そして夜は更けていった。

翌日、大道と佳奈は行動を開始した。まずは杏はいそうな場所を聞くために、
「っち、この前はすぐ見つかったのに、あの子狐はどこかいねえか」
そうPC上であの情報屋子狐を探していたのだ。
そして佳奈は
「ったく、携帯にも連絡ないってことはまだ見つかってないってことか・・・」
町で大道からの連絡を待っていた。
情報屋なら杏の居場所とか知っているかもしれないとまずはそれを考察した。
佳奈はその日は休日、というか高校2年の夏休みである。
「ああ高校2年の夏で何やってんだろう」
（もちろん黒い巫女を探しているんですよ）
それはその通りである。
（アカマガは気配とか感じる？）
（いえいえ、私より大道のレーダーが正確ですよ）
それは勾玉としてどうなんだという話だ。というかさっきからなぜか見られていた。外国人に。
「えっと、なんですか？」

まさかアカマガとの会話で変な人とか思われた？
「オー、ゴメンナサイネ、ジロジロ、ミテ。ソノマガタマキレイデスネ」
どうやら勾玉がきれいだったから見ていただけらしい。
「ああそうなの、えっと・・・、観光客ですか？」
というかなんだか見たことあるような気がする。
（きれいですか・・・、うれしいですーーーー）
アカマガはきれいと言われてかなり興奮していた。ほめられると興奮するタイプか。
「イイエ、チガイマスヨ。ワタシ、アナタトオナジガッコウデス」
そういわれた時、最近隣のクラスに転校生が留学してきたと噂にはなっていた。まあそのときは全国先生のこともあったし、その入れ違いかなんかで黒い巫女の黒目杏が登場で忘れていたのだった。
「ごめんね。でも何で私の子と知ってるの？」
いくらなんでも隣のクラスの子は知らないだろう。
「オボエテマセンカ？タイイクデクンダデハナイデスカ。ソシテジコショウカイシマシタ」
ああ、あの時はいろいろ考えていて、まあこの子が自己紹介してきたから、学校ぐらいは友達ほしかったし。いろいろ愛想がいいようにしてるんだった。でも覚えてないのは考え事をしていたから。
彼女の名前はたしか、
「ジャア、マタジコショウカイデス。ジェニファー・ツンデレ、デス。ベツニツンデレジャナインダカラネ」
私はそのジョークで笑うことができた。そのとき
「おい、あの情報屋、見つけたぞ。すぐ近くだぞ」
大道からの連絡だった。
（きれい。ふふふ）
アカマガはまだ興奮が冷めていなかった。
「わかった」
と携帯を切った。

「ごめん。行かなきゃ」
「イイデスヨ。イッテクダサイ。マタガッコウデアイマショウ」
「うんまたね」
なんだか友達ができたみたいだ。美希しか友達いなかったから。
なんだか嬉しい。
だがジェニファーがまさか親睦が深まる事件が起こるとはそのときは知る由もなかった。
「アレハ、ナニカトタタカウメデスネ」

そして情報屋の子狐はいた。
「お願い。教えてよ黒目杏(くろめあんず)がいそうなとこ」
「なんじゃい、われに聞くんかの」
尻尾を掴んで強引に聞いていた。
「おいおい、ずいぶん、逃げたがるな」
そして大道もすぐきた。汗からして走って来たに違いなかった。
アカマガは
(きれい。きれい。ううきれい)
まだ興奮していた。
「ぬー、われも詳しいことと詳しくないこと、言っていいことと厳密なことはあるわい」
でもこの前口が軽そうだった。首謀者の特徴言ってたし。
「でも、知らんことはないのじゃい」
それを聞いてぱっと嬉しくなった。
大道も同じだったらしい
「なら教えてくれ。黒い巫女はどこにいるんだ」
大道はアカマガみたいな興奮して言った。
「男よ、鼻息が荒いわ。まあまて、教えてやるには条件がいる」
大道は鼻を押さえた。というか条件ってなに?魂よこせとか?
「われの名前を答えろ」
・・・。そういえば名前知らなかった。杏も情報屋としか言って

ないし。子狐とかしか言ったことがないから、名前知らなかった。
「ほれ答えろ。どうじゃ、教えておらぬからな。答えぬと情報はやらんぞい」
むかつくけど。ロリ声だからまったく怖くはないし、むかつきはしなかった。巨乳お姉さん好きは大道は、考えている表情をしていた。さっきの鼻息はもう大丈夫らしい。
（きれい。ってここはどこですか？）
今の今まで興奮からさめたらしい。それほどジェニファーから言われたことが嬉しいらしい。
ってまさか、
「わかったジェニファーでしょ」
「おぬしはふざけておるのか？はい解答権あと４つじゃ」
どうやら解答権が５回儲けてあるらしい。
「解答権って一人５つ？」
「そうじゃよ。まあ頭の悪いお主じゃ、５回あっても答えることは不可能じゃろう」
バカにされている。むかつくはずだが、ロリ声がなぜかむかつきはしなかった。ロリ声は卑怯だわ。
っと大道は隣で立ちながら寝ていた。
「ちょっと大道、寝てないで、答えないと情報くれないって」
「おお、あ～あ～、まああまり寝てないからな」
大きなあくびでそう言った。徹夜ってことですか。
「でもそのおかげでいろいろな専門用語とかいろいろな名前覚えられたぜ」
これはかなりの武器となる。さあさっさと答えて、情報もらおうかな。
「なぬ、情報屋じゃぞ、ふふふんお主に答えられることはできまい。昔の名などもう解明したわ」
なんだって。というか闇族って昔の人なの？それまだ大道から聞いてない。今度聞こう。

「なんだって・・・、それじゃ小股ちゃんじゃないのか」
オマタちゃん？プッと吹いた。
（プッ）とアカマガも
「なんじゃその昔の名前は！！今の時代でその名を使うなど恥ずかしくて死ぬわ！」
そりゃそうだ。どうやら時代に合わせたらしい。さてどうするか。
私達は適当に3回ずつ、山田花子だの黒目杏だの芦屋真菜だの、あかりちゃんやつかさ、子狐ちゃんと言う答えを言っていた。まあ全部不正解だったけど。
「どうじゃ、あと1回ずつじゃぞ」
もう後がなかった。さてもうこの子狐の名前がわかんない。
「あっはっは、われの名マドマギなどわからんじゃろ」
・・・。答え言ってるじゃん。この前見たく口は軽かったらしい。
そして
「マドマギでしょ」
「なんでわかったんじゃ」
あんたさっき言ったじゃん。天然なのマドマギちゃんは。
「しょうがないの、約束どおり情報を言おう」
私達は情報をもらった。居場所を
「ありがとね。マドマギ」
「じゃあな。また会おうぜ」
「うぬ、また頼ってくても構わんからのう」
っとロリ声で叫んでいた。

そして人気のいないくらい場所
マドマギが言っていた場所。まあ「あっちいってこっちいったところじゃ」という案内だったけどね。
「って本当に出るのか？」
「マドマギを信じようよ。来るよきっと」
そうしている中1時間ほど

2人は寝ていた。
「あ、寝てた」
（はい。寝ちゃってました）
大道は徹夜みたいだから寝かしておこう
「まあ、寝ている人を殺すのは卑怯だし、私も復讐って感じがしないわ」
（ギャハハア、まさかここにくるとは思ってもなかったぜ）
と2人の声が聞こえた。
それは
「黒目杏（くろめあんず）」
（クロマガですね）
そう黒い巫女が変身状態で登場した。上のビルから。見下した顔で今上からゆっくり降りてきた。
「こっちは好都合よ。さてと決着といきましょう」
「うん、でも私は殺しあいに来たんじゃない。誤解を解きに来たの」
「誤解ですって？」
そう5年前の誤解
「だから私はあなたを倒す」
「なら私はあなたを倒す
「”チェンジ　ミデアム”」
伝えなくちゃならないこと、あの事件の首謀者。私は世界を救うためにやったこと。全部
私が体で。全部彼女にぶつける。
「いっくよ～、”全力バズーカ”」
「ふふ、そうでなくては私も本気よ。クロマガに言われた私の弱点、もう感情的にはならないわ”バースト　キャノン”チェック、燃料チャージ、フルバースト」
っと閃光が走った。
（あれはとても危険です。当たってたらどうなっていたか）

さっきの攻撃を何とかかわした。
「”斬フレイム”　フルバースト」
全国先生に使った最大の火炎を撃ちかました。それは竜のような炎を撒き散らした。
「いいわ。でもまだまだよ”キング　チェーンソー”　チェック、”貫く月”」
白い閃光が今にも切られそうなソニックビームが直撃してしまった。
「当たったわ。さてもう一発”貫く月””貫く月”あはははは、死ぬがいいわ。死ね死ね死ね。死になさい宮本佳奈（みやもとかな）！」
何発も何発もの攻撃でさすがにうるさかったのか大道が起きた。
「なんだってんだよ。ってどうなってるんだこりゃあ。おい！佳奈あああああああ」
大道が見た佳奈の姿は血まみれで死んでいるかのような姿だった
「佳奈！佳奈！死ぬな。伝えることがあるんだろ。おい、しっかりしろよ」
必死に大道は叫んでいた。だが佳奈へは届かなかった。
「もうその子は手遅れだわ。このくらいの実力で私に挑むなんて。笑えるわね。何か伝えたかったみたいだけど。もう手遅れね。死ぬがいいわ、どきなさい人間。死ぬわよ。とどめだから」
っと大道はどかなかった。必死に佳奈を守っていた。
「どきなさい。死にたいの？もう私に何か伝えることなんて不可能よ」
「っく、でも俺はどかねえ。最後までこいつの思いは無駄にしねえ」
（ぎゃはははは、いい面だぜ。そういう男嫌いじゃねえ）
と大道は目を瞑っていた。
「私伝えたいことがあるの、あなたは誤解してる。私は首謀者じゃない。それに私、あなたと友達になりたい。それくらいわかるでしょ。私を殺しても意味がないことぐらい。あの情報屋から聞いて

るでしょ」
どこからか佳奈の声が聞こえた。
大道が抱きついている佳奈は口を動かしてはいない。
「ふふ、幽霊になっても伝えたいことなんて滑稽だわね」
だが幽霊ではなかった。
「”朱雀炎フレイムガトリング”フルバースト」
ガトリングの銃弾が空から降ってきた。大道にはバリアーみたいなのが張ってあった。
「バリアー”完全なる防御”」
「なっ」
杏が驚いてみた姿は。血も付いていない佳奈の姿だった。
「あなた幽霊ではないようね。どうやって、まさか」
そう佳奈がやったこと。それは
”身代わり分身私”という術だった。
「いつの間にこんなに多くの技を」
大道は笑っていた。
「さっきの言葉。確かのあの小股の情報屋からは聞いたわ。だけど。私は信じない。信じてたまるものですか」
っとすかさず”キング　チェーンソー”を打ち続けた。
「今度は殺すわ。今度は本気で・・・」
彼女からは涙が出ていた。
「なんで、もう感情的にはならないって」
（もういいんじゃねえか？お前ももうわかってんだろ、彼女が首謀者ではねえことくらい。）
（クロマガのくせに私に意見するの？私は彼女を・・・）
（いい加減にしやがれ！お前、生きている価値がねえだの、いろいろ前から言ってきやがって、この娘が何も悪いしてないってわかってんだろ。ただお前はなにかにぶつけたかったんだろ。復讐だのなんだかんだ言って。おめえ、ただ現実から逃げたかったんだろうがあ。）

（私は別に現実はわかって・・・）
（おめえは全然向き合ってないんだよ。ただ逃げているだけだ。家族ともう一度家族になりたい？おめえは理想ばっかり追い求めて行動は一切しねえじゃねえか。それに本当の首謀者には敵わないからただあの娘にぶつけている。わがまま娘にしか俺には見えないね）
っとクロマガは杏の変身を解いた。
「あ、変身が、」
「佳奈、お前もな」
「ああうん」
杏は泣いた。現実を今ある。自分の現実と向き合った。
そして佳奈が杏のもとへ近寄ってきた。
「あ、ごめんなさい。ごめんなさい。私、あなたは何も悪くないのに」
杏は泣きながら頭を下げた。だが佳奈は
「ううん、わかってくれればそれでいいの。それに私あなたの言いたいことがあるの」
「なに？」
佳奈はふうと息を呑んで言った言葉が
「友達になってくれないかな」
こうしてこの事件は終わった。
佳奈と杏は見事友達となったらしい。
実はこの近くに杏の実家があった。実は杏は学校へは行ってなかった。だから佳奈の学校に編入した。
そして杏も実家に帰った。ちゃんと家族と向き合った。
佳奈は相変わらず大道の家に
「あなたたちって付き合ってなかったの！」
杏は大道の家に初めて？行って驚いた。てっきり大道と佳奈は恋人関係だと思っていたらしい。
「なんで私がこんな変態と付き合わなくちゃならないの？」
「それはこっちの台詞だ」

杏は笑っていた。もう悲しみの顔はクロマガいわくしなくなったという。

「ただいままママ」
杏は本当の笑顔で家に帰ることができた。
（ぎゃははは、ただいま）
杏の思い描いた。家族へ戻るのはまだ時間がかかるようだが・・・

「佳奈、私ね。学校へ行くわ」
「うん」
だがその背後には柱にはジェニファーが見ていた。
「ワタシモトモダチネ」
オーラを放ちながら言った。

新たなる巫女、黒い巫女（後書き）

最後まで見てくれた人はマジでありがとう

次はいつからはわからないけど

おたのしみに

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1327y/

彼の私と５年前の私

2012年1月2日10時47分発行